

子育て期女性の仕事と家庭の相互充実を支援する Digital Story Telling(DST)による実践の開発

荒木 淳子 佐藤 朝美
Junko ARAKI Tomomi SATO

産業能率大学 愛知淑徳大学

SANNO University Aichi Syukutoku University

〈あらまし〉 本研究では、子育て期（末子が小学生以下）の働く女性を対象とし、女性自身の仕事と家庭における役割の相互充実を促すための実践を開発する。仕事と家庭とが相互に充実し、一方で役割がもう一方での役割に肯定的な影響を与えている状況は「肯定的スピルオーバー」と呼ばれる。本研究では、子育て期女性自身の心理的な肯定的スピルオーバーを向上させるため、仕事と家庭それぞれの領域における役割を明確化し統合する Digital Story Telling (DST) による実践を開発する。

〈キーワード〉 仕事と家庭の相互充実、肯定的スピルオーバー、Digital Story Telling(DST)

1. はじめに

少子高齢化による労働力不足や女性の活躍推進のため、日本では男女共同参画社会基本法の制定（1999年）以降、内閣府男女共同参画局を中心に仕事と家庭の調和を目指すさまざまな施策が実施されてきた。この間、民間企業においては、産前産後休業や育児休業などの子育て支援、介護休業制度といったワーク・ライフ・バランス（以下、WLB）施策が整備・拡充された。政府は、2020年までに企業における女性管理職の割合を30%にまで引き上げることを目標とするなど、仕事と家庭の両立に関する関心が社会的に高まっている。

しかし企業におけるWLB施策の充実が進む一方、日本では依然として出産前に働いていた女性の約6割が第一子出産後に離職しており、この数字は30年間でほとんど変わっていない（国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向調査」）。企業の管理職に占める女性の比率も欧州諸国に比して低いなど、日本では女性が仕事と家庭での役割を両立していくことはまだ困難な状況にあると言える。さらに仕事と家庭の両立は女性だけでなく、親の介護等男性にとっても身近な問題である。このように日本では、企業だけでなく社会全体において、働く人の仕事と家庭の両立をどう支援していくかが課題となっている。

2. 本研究の目的

本研究では、仕事を持って働く子育て期女性（末子が小学生以下）を対象とし、子育て期女性

の仕事と家庭の両立を支援するための実践を開発することを目的とする。

仕事と家庭のバランスについては、これまで双方の葛藤が注目されてきた（金井2002）。しかし最近では、葛藤だけでなく、仕事と家庭での役割が互いに肯定的な影響を与え合う「仕事と家庭の相互充実（work-family enrichment）」（Greenhaus and Powell 2006）に関する研究も進んでいる。

「仕事と家庭の相互充実」とは、「仕事と家庭において片方での役割がもう一方の生活の質を向上させること」と定義される（Greenhaus and Powell 2006）。同様の概念には、「仕事と家庭の相互促進（work-family facilitation）」、「仕事と家庭の相互強化（work-family enhancement）」等がある。「促進」とは、ある役割に関わるリソース（感情、スキル、自尊心、金銭的利益等）がもう一方の役割におけるパフォーマンスを促進することであり、「強化」とは、多重役割にコミットすることで心理的および社会的リソースが強化されることである。Polemans et al.(2011)は、これらの概念はいずれも、仕事と家庭双方の領域への参加に関する楽観的な側面を記述したものであるとし、「肯定的スピルオーバー」としてまとめている。本研究でも Polemans et al.(2011)の定義に基づき、仕事と家庭とが互いに肯定的な影響を与え合っている状態を「肯定的スピルオーバー」と呼ぶ。

その上で本研究では、仕事と家庭の両立につい

て、子育て期女性自身の心理的な満足感として、仕事と家庭の肯定的スピルオーバーに着目する。

肯定的スピルオーバーとは、多重役割においてある役割における肯定的な雰囲気、スキル、価値や行動がもう一方の役割に転移することと定義される (Kirchmeyer 1992)。近年の研究では、仕事と家庭の仕事と家庭の「肯定的スピルオーバー」が、個人の心身の健康を促進するだけでなく、仕事への満足度やモチベーション、仕事に関わる能力の向上につながる事が明らかにされている。子育て期女性の仕事と家庭との両立についても、仕事と家庭における役割相互のコンフリクトを解消するだけでなく、それぞれの役割が互いに充実するよう支援することが、女性自身のキャリアや仕事のやりがいにとって重要と考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、子育て期女性を対象とし、子育て期女性の肯定的スピルオーバーを促すための実践を行う。

肯定的スピルオーバーの方向には、「仕事」から「家庭」へと、「家庭」から「仕事」への二つの流れがある。日本では林・唐澤 (2009) が肯定的／否定的スピルオーバーの尺度化を行っているほか、高村 (2015) が内閣府 (2011) の調査をもとに点数化を試みている。本研究では林・唐澤 (2009) より、以下の項目を肯定的なスピルオーバーを測る尺度項目として用いる。

表 1 仕事と家庭の肯定的スピルオーバー (林・唐澤(2009)より筆者作成)

「家庭」から「仕事」への肯定的スピルオーバー
・家庭があることでリラックスでき、翌日の仕事への備えにもなる
・家庭で尊敬され、愛情を感じることが仕事での自信につながる
・家で必要なことをしていると、仕事でもなお一層一生懸命にできる
・家で誰かと話すことが、仕事での問題解決に役立つ
「仕事」から「家庭」への肯定的スピルオーバー
・仕事でやっていることが、家庭での問題を対処するのに役立つ
・仕事で身についた能力は、家庭でも役立つ
・仕事をしていることで、家でも魅力的な人間になることができる

これまでの研究では、肯定的スピルオーバーには、職場における両立を促進する文化や上司や同僚のサポート、家庭における配偶者のサポート等様々な要因が影響することが指摘されている。その中でも、Carlson et al.(2006)は、肯定的スピルオーバーの前提条件として、本人の自己概念や価

値観の重要性を指摘し、自己概念の中で職場と家庭どちらの役割に重みづけをしているかによってリソースの使い方も異なると述べている。本研究でも子育て期女性の自己概念に着目し、子育て期女性が仕事と家庭双方を含む自己概念を生成し、自己の価値観を認識するための支援を行う。

具体的な支援方法として本研究では Digital Storytelling (DST) を用い、子育て期の女性自身が仕事と家庭での役割を振り返り、自分自身のあり方を語る実践を行う。佐藤ら (2013) は DST を用いて家族の Narrative Skill を支援する実践を行っており、「経験の意味づけ」を行う活動には DST が適していることを指摘している。DST を用いることで、子育て期女性自身が仕事と家庭双方での経験を意味づけ、振り返ることができると考えられる。子育て期の女性自身が仕事と家庭それぞれにおける自分の役割を統合させて物語を紡ぐことで、自身の役割や価値観を明確化し、仕事と家庭の役割を見直す契機とする。実践では DST を用いて物語るだけでなく、ワークシート等を用い、女性が自己概念に基づき自分のリソースをそれぞれの役割に配分するまでを支援する。

4. 研究結果の分析

実践に参加した子育て期の女性に「仕事と家庭の肯定的スピルオーバー」に関する事前事後の質問紙調査、事後インタビューを行い、実践によって心理的な肯定的スピルオーバーが促進されたかを測るとともに、作ら得た作品についても評価を行う。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 26350338 (代表：荒木 淳子) の助成を受けたものです。

参考文献

- Polemans, S., Stepanova, O. and Masuda, A. (2001) Positive spillover between personal and professional life (Korabik, K. Donna, S. and Whitehead, L. ed. Handbook of Work-Family Integration. Academic Press.)
- Valcour, M. (2007) Work-based resources as moderators of the relationship between work hours and satisfaction with work-family balance. *Journal of Applied Psychology* 92(6): 1512-1523.
- 佐藤朝美・椿本弥生・朝倉民枝 (2013) Family Narrative 支援活動「未来の君に贈るビデオレター作成 WS」のデザインと実践. 日本教育工学会論文誌 37(3):229-239.